

1993年度日本気象学会春季大会シンポジウム 「メソスケールの気象予測—展望と課題—」の報告*

はじめに

永田 雅**

1993年度気象学会春季大会シンポジウムは5月18日(火)午後、気象庁講堂で、「メソスケールの気象予測—展望と課題—」と題して4名の講演者を迎えて行われた。立ち見が出るほどの盛況で、各講演に対して活発な質問が出て盛り上がったが、時間が限られていたため、総合討論の時間が極めて短くなってしまった。このため、問題点の具体的な解決方法、とりわけ新しい観測システムの構築、特別観測を含む研究協力体制の整備、データへのアクセスの問題、各種のソフトや研究成果の提供や交換など、制度にも関わる重要な問題について、具体的な提案を含む討論ができなかった点が惜まれる。時間配分、講演者数、テーマのたて方など、シンポジウムの運営についても、今後、検討を継続して行くことを希望する。

さて、シンポジウムは、座長の趣旨説明に続いて、講演は、1. 松野氏(東京大学気候センター)から、地球大気の普遍的なシステムとしての雲クラスター研究の重要性について、2. 瀬上氏(気象庁)から、数値予報モデルによるメソ β スケールの予測の課題と展望について、3. 吉崎氏(気象庁気象研究所)から、積雲対流そのものを表現する数値モデルの初期値化にドップラーレーダーデータを使うリトリーバル法について、4. 小倉氏(日本気象協会)からメソ気象学の発展の健全な進め方と概念モデルの位置づけについて、それぞれ興味深い話題提供があった。また、総合討論では、小倉氏の講演でも取り上げられたメソ天気系の概念モデルの開発について、気象庁の予報の現場で行われている具体例を含めて入田氏から紹介があった。以下、趣旨説明、講演と紹介の要旨及び討論の要

約(Q:質問, A:回答, C:コメント)である。

趣旨説明

「今なぜメソの、そして予測なのか?」という点について若干の説明をしたい。まず、気象業務の面からは、昨年3月に気象審議会から出た答申にも表されているように、気象庁の業務として、注意報や警報に直接関係することの多いメソスケールの気象現象の予測を、確かな科学的基礎の上に立って進める必要がある。しかし、これまでの技術の単なる延長線上では観測データの制約や擾乱についての理解の不足のために、展望を開くことは難しいのではないかと危惧されている。そこで、メソスケール気象予測のために、これからどういう点が問題となり、その解決のためにはどう取り組むべきかという点を明らかにする必要がある。

このような気象業務の立場を離れても、地球の気象・気候システムを理解するのに、その中のメソ擾乱、特に降水システムである雲クラスターやスコールライン、レインバンド等を放射特性まで含めて総合的に正しく理解することが不可欠であるとの認識が一般的となり、このため、例えばGEWEX(全球エネルギー水循環実験計画)等の研究の主要テーマにこれらを取り上げられている。

こうして、「メソ気象」は今や、学術・業務の両面で極めて重要視される分野になってきており、その意味で今回のシンポジウムは非常にタイムリーなものと考えられる。

* Report of Symposium on "Mesoscale Meteorological Prediction : Outlook and Challenging Issues" at the 1993 spring assembly of the Meteorological Society of Japan.

** Masashi Nagata, 気象庁数値予報課.